

「コミュニケーション」の形成過程における内容分析

——1960年代から1980年代の新聞紙面上の表現に着目して——

尾添 侑太

本稿の目的は、日本において「コミュニケーション」がどのようにわれわれのかかわりをあらわす言葉として流通し、定着したかを明らかにすることである。方法として、1960年代から1980年代の新聞記事を対象に分析した。「コミュニケーション」という言葉が、機械的な情報伝達の意味ではなく、直接的な人と人との間で交わされるやりとりを指すものとして使用されるのは、すでに1960年代に確認できる。そして、「コミュニケーション」は1980年代までに、当時の人びとの生活上にかかわるさまざまな「断絶」の問題を浮かび上がらせる言葉として、またそれらをつなぎあわせる言葉として説明される過程を経ていくことがわかる。こうした作業は、コミュニケーション問題が規範的なコミュニケーションのあり方をめぐるものとして表出している現代において、オルタナティブなむすびつきを考える可能性を有している。

1 問題の所在

コミュニケーションの問題は現在、社会上に多くあふれている。中島梓(1991)は、「コミュニケーション不全症候群」の典型として、オタク、登校拒否、拒食症過食症、対人恐怖症、家庭内暴力、未成年の麻薬、暴力、性犯罪、離婚、精神障害等を挙げている(中島1991:21-2)。そして、現代ではこのような特異な事例のみにとどまらず、さまざまな局面においてあらゆる問題が「コミュニケーション」を用いて説明されている。また、1990年代前半に増加しはじめる「コミュニケーション能力」言説に代表されるように、現代では「コミュニケーション」は個々人が所有するなにもものかのように示されるケースもあり、またそうした言説は家族や友人関係などのプライベートな領域から、仕事や社会参画などのパブリックな領域を横断する形で存在しているといえる。ここで問題となるのは、第一に、本来多様であるはずのコミュニケーションの形が「理解し合う」といったことや「関係の構築」という帰結に回収される危険性があるということである。第二に現代の「コミュニケーション」がこれまでとは異なる形での排除や疎外を生み出すのではないかということである。たとえば、「コミュ障」という言葉の流行は、現代では「コミュニケーションがとれなければ生きていけないのではないか」という不安の表れとも考えられ、またそうした不安は、多様な広がりを見せる他者との関係を保持しているということが、一定の肯定的な価値—規範—として受け取られていることと関連する¹。今では「同じ場所」、「同じ世代」、「同じ言語(文化)」といったような、属性的な同質性はわれわれを従来のように強く結びつける力を発揮しておらず、とりわけ1990年代以降に新たな連帯の模索が始まっている(尾関1995ほか)。そうした状況では、「自分が一体どういう人間であるか」といったことなどをその都度表明する必要性が出てくる。言い換えれば「コミュニケーション」は未来社会において道徳的な個人や関係性を秩序立てて創り出すという点でますます規範化していくことが想定される。しかし、一方でそうした連帯を志向する意志や能力を持たない／持つことができない人びとは、社会構想

の中から外され生きる場所や方法を失ってしまうのではないか。属性や身分がかつての排除の一因であったとするならば、現代ではコミュニケーションを適切に行えるか／行えないかという点における選別や排除が生じる可能性がある。こうした問題にアプローチするためには、現代の「コミュニケーション」概念の不十分さを説明する必要がある。

そこで本稿では、現代のコミュニケーション概念の再検討を行ううえで必要となる、日本社会における「コミュニケーション」の普及と意味形成のプロセスに焦点をあてる。そもそも、日本において「コミュニケーション」という概念が、われわれの直接的な対人関係を説明する日常用語として定着しはじめるのは1980年代頃と言われている（長谷・奥村2009）。わずか前には日本には存在していなかった言葉が、社会のあらゆる場面に浸透し、説明されていく一つまり、コミュニケーションが前景化している一状況である。また、すでに「コミュニケーション」という言葉は記号のように認識され、その言葉が指し示す意味や問題性が考慮されることは少ないといえる。社会学の領域においても「コミュニケーション」とはいかなるものかということについて、さまざまに論じられてきた（田中2000; 長谷・奥村編2009ほか）が、そもそもなぜ「コミュニケーション」という言葉をわれわれの社会で語る必要ができたのかということに対してはあまり蓄積がない。現在の氾濫する「コミュニケーション」の問題にアプローチする際、現状のコミュニケーションの模範がどのように形作られてきたのかを考える作業は、われわれの日常的なコミュニケーションの問題にとって有効なものであるばかりでなく、社会と個人、個人と個人のむすびつきの現代的な位相を考察するうえでも重要なものである。

そこで本稿では、新聞記事の分析を通して、日本における「コミュニケーション」の普及が何を達成するために使用されてきたかを明らかにする。とりわけ、「情報伝達」という意味を越えていくことが何を示しているのかを中心に考察をくわえる。なお、本稿では、1990年代以降を「コミュニケーション」という言葉が一般社会に浸透しきった「記号化」の時代区分と捉え、それ以前を「コミュニケーション」が一般社会において浸透していく過程としての「概念化」の時代区分と捉える。そのうえで、記事の対象を1980年代までに絞った。

2 方法とデータ

本稿では、日本において「コミュニケーション」という言葉がどのように説明されてきたのかを言説に着目して分析を行う。具体的には新聞記事（朝日・読売・毎日の主要三紙）を取り上げ、それぞれのデータベースを利用して「コミュニケーション」を検索語として該当した記事を対象とする。表1はそれぞれの期間の検索ヒット数である。なお読売新聞の検索データベースでは1986年までの記事についてはキーワード検索しか使用できなかったため、見出しや本文中に「コミュニケーション」という言葉が無くても記事としてヒットした。そのため、検索にあがったすべての記事に目を通したうえで本文中に「コミュニケーション」という表現がない記事に関しては分析の対象から外している。他紙に比べてヒット数が多いのはそのためである。本来であればすべて同様の方法を取るべきであるが、本稿においては朝日・毎日に関しては本文と見出しでの検索を行っている。ただし、本稿では、量的な変遷

ではなく、どのようにして「コミュニケーション」という言葉が当時において受容され、その意味にどのような変遷の型がみられるかということが重要である。

表 1 主要三紙の「コミュニケーション」に関連する記事数

	朝日	読売	毎日
1960-64	3	33	1
1965-69	2	64	1
1970-74	6	133	12
1975-79	20	122	7
1980-84	137	297	19
1985-89	993	1044	124
計	1161	1693	164

対象とした期間は 1960 年代から 1980 年代までの 30 年間分である²。以上の記事の中から、「情報伝達」という意味以外でコミュニケーションがどのように記述されてきたかに着目して記事をさらに限定し 536 件の記事を対象とした。紙幅の制限上、すべてのデータを記載することは困難であるため、本稿では「コミュニケーション」という言葉に対する説明のされ方の典型的なデータ 13 件を分析する。なお、データ中の下線は筆者によるものである。

次節では、時系列に沿いながら、「コミュニケーションとは何か」ということが単に情報を伝達するという意味以外でどのように説明されてきたかを中心に分析を行う。そこでは「どのようにコミュニケーションは達成されるか」という言説と「何がコミュニケーションによって達成されるか」という言説が混じり合いながら進展していく。1960 年代では親密な関係、とりわけ夫婦や親子などの家族関係の問題やそれを解決するための方法として「コミュニケーション」が使用され、1970 年代には企業活動や政治領域にも拡大していくが、こうした言説はグローバル化などの影響を受けながら「コミュニケーション」の内容を指し示していく。また、同時並行的に、「コミュニケーション」とは、「ニュー・メディア」の急速な普及に代表される 1980 年代前後の情報化の進展に伴う人間一般の疎外の問題とも結びついて説明されていく。以下で詳細に分析する。

3 分析

3-1 親密化の方法としての「コミュニケーション」——1960 年代の家族・企業

まず、コミュニケーションという言葉が「マス・コミュニケーション」という用法や情報の伝達や通信という意味以外で何を表しているのかについて、以下のデータを参照しながらみていく。

① 八日付け「自分の話し言葉も鏡にうつせ」の市川さん—その趣旨には賛成ですが、第三者的ないい方が気になります。夫婦とはお互いが鏡ではないのでしょうか。ダンナさまが正しい言葉づかいをすれば、妻もそのミスに気づくはず。

私の場合、正しい言葉に気づかいされることは年中です。それに標準語だって絶対の

ものではなく、年とともに変わります。上意下達（じょういかたつ）が「げだつ」に、発足（ほつそく）が「はつそく」に、ほおえみが「ほほえみ」に一などと。ですから、一度覚えればいいというものではないようです。それだけに毎日が勉強で、ラジオ、選挙演説、チラシ広告だってみんなその材料になります。

大体「はじめに言葉ありき」という言葉があるくらい、コミュニケーションは言葉が基本です。ところが夫婦の間では、話をしなくても通じるとでもおっしゃるのでしょうか。家族の言葉は夫が鏡です。一緒に鏡になり合ってコミュニケーションを行ない、勉強してください。（新潟市・和田 礼子・32）（『読売新聞』1960.11.15 朝刊、9）

①は、ある男性が配偶者の言い間違いや過剰な敬語の使用の多さへの不満を新聞の投書欄に投稿したものに対する返信である。1960年代には、夫／妻という私的な領域のやりとりに対してすでに「コミュニケーション」という言葉が使用されていることがわかるが、ここでは、コミュニケーションとは第一に「言葉」によって話をする点と、第二に鏡となり合う、つまり相互性という性質を帯びているものとして説明されている。これは言い換えれば、「話し合う」ことを指しているといえる。また、「言わなくてもわかる」ようなものではなく、言葉によって表現されなければならない、それが「コミュニケーション」を性格づけている。

② Communication

「情報伝達」あるいは「意思疎通」のことで、経営上では企業の神経系統に相当する基本的な機能である。企業には、管理的コミュニケーションと、社会的コミュニケーションの二つの流れがある。前者は組織、職制を通じての命令、報告、横の連絡など、企業活動遂行のための情報の流れで、後者は人間の生活の場としての意思疎通である。

合理的、能率的な経営には、企業内外の情報が速く、正確に、必要なところへ届くよう、事務の機械化や報告制度の確立が必要であり、また職場相談会や社内報、あるいはレクリエーションなどの機会を活用して、従業員がお互いに知合い、親しみをもつよう配慮することが必要だとされている。（『朝日新聞』1963.12.8 夕刊、7）

②は、新聞上の一言辞典の記載であるが、対象となる領域は企業である。ここでは「情報伝達」のほかに「意思疎通」が挙げられている。「意思疎通」というのはコミュニケーションの訳語として現在でも使われるが、ここで特徴的であるのは、それが「人間の」ものであるということである。また、意思疎通の内容としてはかかわりのある人どうしが親しみを持つことができる視角が設定されている。このように、合理的な「情報の流れ」を指し示すと同時に、従業員同士の親密さの増大がコミュニケーションの機能として説明される。

データ①の「鏡になり合って」、データ②の「お互いに知合い」という表現から、コミュニケーションには二者が互いに向き合う形式が想定されていたと考えられる。そして、「コミュニケーション」とは、夫婦や従業員がより親密になるための方法として、一定の期待が付与されているといえる。しかし、一方で、1960年代にはまだそうした「互いが向き合い、言葉のやりとりで近づいていく」ということに対するネガティブな反応もみてとれる。

③ 九日の本欄に掲載された「子どものしつけ再認識の時」と「あきれた教育ママの“おしえ”」の二つの投書を読んだが、まったく同感である。(中略)

戦前派の父親は、がんこながら良い意味の“父親らしさ”を身につけていたが、現代の父親は“親と子の対話”などといってハレ物にさわるように子どもを甘やかし、おだてては親を理解してもらっている状態である。これではしつけどころではない。親と子のコミュニケーションは対話だけでなく、はだで伝え合うものだと思う。父親は強くきびしいものだという本来の姿にかえるべきだ。(『読売新聞』1968.6.16 朝刊、8)

たとえば、データ③では「ハレ物にさわる」という表現からわかるように、対話的コミュニケーションが親と子の距離を生じさせるものとして認識されている。また「はだで伝え合う」というのは、言葉によるやりとり以上に伝達できるものがあると信じられていることを示す。また、こうしたかかわり方は親子のしつけだけではなく、夫婦喧嘩の仕方においても適用されている。

④ トコトンまでやりあわない、内攻型、沈黙作戦——も近ごろの夫婦げんかの特徴らしい。ことに結婚後数年たつと、お互いの理解も進み、なれあい、あきらめムードも出る。子どもができればなおさら夫婦げんかはタブー。「昔の方が人間的」。下町などでは戸障子あけ放してどなり合い、投げあい、それで翌日はケロリという夫婦げんかが多かった。近ごろのやり方は、お利口かも知れないが、陰気くさい。お体裁の平和主義ってんじゃないカネ」とは、あるお年寄りの評。

ともあれ「相談にくる夫婦は、ふだんのコミュニケーションがまったくないのが特徴」というのは東京家裁で夫婦カウンセリングを担当している主任調査官の新田慶さん。ユーモアのゆとりを忘れずに、子どもを味方にせず、一対一で時々やりあうことは、むしろ夫婦の結びつきを強めるそうだ。皆さん、安心してどうぞ。(『読売新聞』1969.2.18 朝刊、8)

データ④は1960年代当時の夫婦関係の変容についての記事の一部であるが、その中で1960年代以前と以降では夫婦喧嘩に変化があらわれていると説明されている。ここでは、「昔」＝「人間的」／「近ごろ」＝「陰気くさい」という比較を用いて、③と同様、話し合いではなく、「ぶつかり合う」作法こそが「人間的」と説明されている。それだけでなく、そうした怒鳴り合いや投げ合いのような「やりあい」は二者の間の「結びつき」をより強めるものとされている。

このように、1960年代当時は、言葉によって歩み寄るという方法と沈黙や非言語的な伝達という方法が、とりわけ家族という領域の中でせめぎ合っていたことがわかる。一方で、そうした模索があったとしても、データ①から④までに共通していることは、「コミュニケーション」に期待されたものは、二者が「合う」、つまり相対することであり、それらを二者が親密になるうえで必要不可欠な達成されるべきモデルとして説明している点であろう。言い換えれば、1960年代には夫婦間、親子間あるいは社員間という二者間において、何らかの「ズレ」があったということを示している。「コミュニケーション」には、そうした「ズレ」を

「ズレ」として認識し、そのズレをなくし近づけていくニュアンスが含まれている。このように考えると、夫一婦、社員一社員（または企業組織一社員）に「コミュニケーション」が用いられるのは、当時においてすでに両者の「断絶」または「疎外」が問題として認識されていたということである。そして、1970年代になると、他国との接触機会の増加などを背景としてデータ③④のような方法での「コミュニケーション」以上に、「対話」としてのコミュニケーションの重要性が次第に高まりを見せるプロセスを辿ることになる。

3-2 対話と「コミュニケーション」——1970年代のタテ社会批判

1960年代にはとりわけ家族（夫婦や親子）の間に存在する断絶とそれをつなぎあわせる適切な方法をめぐって「コミュニケーション」という言葉が模索されていた。そうした流れのなかで、家族という領域にとどまらず、1970年代には企業活動を中心に伝統的ななかかわりの自明性にも疑問が投げかけられはじめる。

⑤ ある集まりで、合弁企業の代表として近く東南アジアへ赴任する人がこんな話をした。「私の会社は東南アに十の子会社、合弁がある。そこへ日本からの派遣員は十二人。ところが米国の親会社は中南米に十五ヶ所で米国からの派遣員はわずか五人。日本はかなりのコスト高だ。どうしてそうなのか。日本人は現地の人を信じないのか、ノーハウを教えたがらないのか、教え方が下手なのか」

これを受けて、戦史研究家の元海軍人がいった。「言葉は別にして、コミュニケーションの問題ではないか。最近の私の関心事は、旧帝国海軍の最高司令官と幕僚の間に果たして本物のコミュニケーションがあったかどうかだ。山本五十六元帥は将棋が好きで、幕僚と将棋をさしながら、次はどこを攻めようという。それだけ。幕僚はこれを聞いて作戦計画は作る。作戦目的とかそのあとのことは問いたださないし、司令官もいわない。将棋をささない司令官はどうしたのかなあ。ともかく、幕僚は司令官の考えていることを察しなければならぬ。それができなければ幕僚の資格はないという人もいる」

秘伝、家伝、奥義という言葉がある。師匠の下でじつと我慢して修行、師匠の心を察して体得する。言葉や記録によらない一方行のコミュニケーション。

この閉鎖的な日本流秘伝主義の伝統が、タイやインドネシアで通じるはずがなく、十二人派遣となる。米国でニクソン元大統領のホールドマン補佐官のウォーターゲート回顧録が話題を呼んでいるが、日本の政治家に資料的価値のある回顧録や日記が極めて少ないのも、この秘密主義のせいだ。（『毎日新聞』1978.3.2夕刊、9）

データ⑤では企業の海外進出における問題として、言語による伝達の問題と同時に、日本人と海外の労働者の間に「断絶」があることが示されている。そして、両者の意思疎通を阻む原因として「日本の伝統」や伝統的ななかかわり合いの作法が存在していることが説明されている。つまり、データ①と同じく、「以心伝心」のような言わないコミュニケーションが、ここでは「本物のコミュニケーション」ではないことが示されている。また「一方向性」もコミュニケーションの問題として認識されている。そして、こうした日本の伝統的な閉鎖性

「タテ社会」は国際化や情報化の流れのなかで、経済領域や教育領域において見直しの対象とされていく。

⑥ 電気通信総合研究所（財団法人・理事長行広清美氏）は創立三周年記念行事としてこのほど東京・大手町の経団連ホールで「これからの社会とコミュニケーション」をメイン・テーマに講演とパネル・ディスカッションを行った。（中略）

主催者側のねらいは、情報化の進展に伴ってますます重要性を増しているコミュニケーションの問題を、電気通信技術、経済、経営実務、社会の四つの視点から展望する点におかれた。

熱心な聴衆の参加で、討議は、情報洪水のなかでの情報選択、また過剰な情報供給のなかで企業などではかえって人間の情報伝達を欠いているのはなぜか、といった情報化社会の核心にふれるような問題がとりあげられた。自主的な情報選択については教育の重要性が一様に指摘されるとともに、コミュニケーションの意識改革がその手段の進歩に伴わなければならないという点が、各講師によって強調された。宍戸氏は「日本人は情報をつくることだけに懸命で、その伝達には不熱心だ」と指摘、また成毛氏は企業内のコミュニケーション不足について「生産は生産、販売は販売というタテ割り社会」の日本人の意識が大きな原因だと述べ、タテ割りをどう横につなぐのかの意識革命が企業内コミュニケーションのカギだと強調した。（『毎日新聞』1970.11.21 夕刊、5）

データ⑥は、通信技術の発達と「コミュニケーション」の関連を示すものである。機器や機械による情報伝達の肥大化を起因として、「人間（同士）の」伝達の不十分さが指摘され、「コミュニケーションとは何か」ということが再確認されていく。つまり情報メディアによる利便性があがる一方で、人間同士のかかわり方の意識変革をもたらす新たな視点として「コミュニケーション」という言葉が使用されていく。そして、それは個々人の意識ではなく、企業組織に由来から存在している「タテ割り」構造そのものに向けられている。

⑦ 永井文相は新聞記者とのインタビューで「対話を通じての相互理解」を教育行政の中心にすえたいと語った。（中略）

文相がいう対話とは、タテ社会をヨコ社会に切りかえるための作業である。もちろん、この作業は容易ではない。しかし、これに手をつけなければ、日本の教育はますます硬直化するであろう。こういった危機感から文相の対話行政の構想は生まれたとみたい。（中略）

教授と学生の間にも対話がない。ヨコ社会としての対話を可能にするのが学生の参加だが、教授と学生の双方に参加を実現する熱意がまったくない。外国人の目に、このようなタテ社会の状況は異様に映るのは当然である。四年前に来日したOECD（経済協力開発機構）の対日調査団は「文部省は権力の権化だと思っている教師たち、大学当局に対し同じような感じをもっている学生たちに出会った」とし、日本訪問中に感じたのもっとも一般的な印象は「コミュニケーションが、はなはだしく欠けているということだった」と報告書に書いた。（『読売新聞』、1974.12.12 夕刊、2）

データ⑦は、教育改革に関連する記事である。ここでは日本社会の外部から見た日本の伝統的な関係の作法のいびつさが指摘されており、データ⑥と同様に「タテ」社会が批判される流れになっている。さらに、ここでは「タテ」から「ヨコ」への転換が指摘されており、そうした転換には「対話」や「相互理解」が必要とされ、それを達成できるものが「コミュニケーション」であることが説明されている。

つまり、1970年代以降では、1960年代を中心としたマイクロな関係と関連しながらも、「分断」や「断絶」の問題性が日本の社会構造や伝統文化などよりマクロな部分にもあると認識され、そうした問題を乗り越える新たなかかわりの作法として「コミュニケーション」が形成され、普及していったと考えられる。

⑧「教育実習廃止」という原田教授のご意見には絶対反対です。われわれのところへも、ついこの間まで教育実習生が来ました。教えるテクニックこそ、あまり上手とはいえませんでした。一生懸命に、必死に教えてくれました。また、先輩というイメージがあったためか、先生が後ろにいても、大変気軽に授業が受けられました。倫理社会の最後の実習生の授業で、「大学とはどういうところか」という話題になった時、書物などであらまし知ってはいたのですが、日ごろ大学生と接触の少ないわれわれ地方の者は、大学生のナマの声を聞いて大変ためになりました。

それに原田教授の文章には学力偏重、受験崇拜的なにおいがしました。別にわれわれは実習生がきたことで迷惑はしておりません。教えるテクニックよりも、専門の学力が第一であるとおっしゃいますが、専門の学力よりも真のコミュニケーションが大切だと思います。（『読売新聞』1975.7.1朝刊、5）

中根千枝（1967）は他国や職業間の比較を通じた分析において日本の社会構造としての「タテ社会」を描いているが、そうした伝統的な組織と個人のかかわりについて「われわれ」という言葉を使用しながら、「集団の個人に対する社会的強制」の強さや個人の自由のなさを指摘し、日本社会の「真の『対話』」の困難さを指摘している（中根 1967: 167-83）。データ⑧は教育実習制度の是非をめぐる新聞投稿であるが、ここでは「真のコミュニケーション」という表現が使用されている。これは、「教育実習生」という存在が、従来の教師—生徒という師弟関係とは異なり、より生徒と近い立場で交流することの心地よさを示すものとして提示されている。1970年代以降では、経済領域や教育領域においても垂直的な関係性を水平的なものに変える必要性が新聞紙面上で議論されていくが、「真の」という表現は「コミュニケーション」の正当性を示すために用いられていると考えられる。以下で詳細にみていく。

3-3 「真の／人間の」コミュニケーション——1980年代の情報化・国際化

1980年代以降には、国際化の進展が早まり、とりわけ外交や異文化との接触が増えたことによって、これまでとは異なる「結節点」が想定されることになる。そこでは、これまでのかかわりかたとは異なるものが「真の」コミュニケーションとして説明される。

⑨ 今年（1980年）は国際コミュニケーション年。さきの大韓航空機撃墜事件の疑問点のひとつは、

ミサイルが発射される前に、ソ連の戦闘機と韓国の旅客機との間に、何らかのコミュニケーションがあったかどうかということである。

この事件には全世界が直面している難問の縮図がみられる。すなわち、二つの全く異なる思想に根ざした文化や政治の間に、真のコミュニケーションが可能かどうか、という問題である。「警告の処置もとった」というソ連パイロットの証言の真実性を認めるにしても、問題は、それが受け取られたかどうかということにある。(中略)

コミュニケーションという単語の語源のコミュニスは「共通」という意味であり、何らかの共通点がなければ、本当の意味でのコミュニケーションは存在しないのである。

私は二つのテレホン・サービスによって、多くの人々にメッセージを毎日伝えているが、こうした一方通行の話は必ずしもコミュニケーションとは言えないだろう。

要するに真のコミュニケーションとは、心と心のふれ合いであり、言葉より行動によって実現するものである。いくら口で「人を愛する、世界平和、正義を望む、行革を行う。政治倫理を守る」と言っても、心に響く行為が伴っていなければ本当のコミュニケーションは成立したとはいえない。(『毎日新聞』1983.11.11 朝刊、4)

データ⑨では一方通行的な共有されないやりとりが「真でないコミュニケーション」として提示されているが、AではなくBこそがコミュニケーションであるということが文脈のなかで焦点化されていくのである。とりわけ、1980年代前半においては、1983年が「世界コミュニケーション年 World Communication Year」に制定されたため、新聞記事においても言及が多くみられた。世界コミュニケーション年が制定された目的は、情報機器の発達をもたらした新たなメディア（テレビ電話や衛星通信など）をうまく利用し、国際交流の量と質を向上させることであつた。その主軸は直接的な人間関係というよりもむしろ、メディアを介在とした新たな間接的な結びつきに焦点化されているが、日本の文脈では間接的な人間関係のかかわり方（たとえば、ろうあ者の通話向上やテレビ電話での会議など）にも適用される一方で、そうしたメディア的なかかわり方から日常の身近な対人関係を見なおす必要性が指摘される。1980年代はその意味でメディア化の進行がもたらす社会（メディアを通じた人と人とのかかわり／メディアを通さない人と人のかかわりの双方）を再考する地点として考えることができる。

また、同様の説明形式として、「人間の」コミュニケーションという記述も象徴的である。

⑩ コンピューターやロボットが急速に進歩して、内蔵したマイコンで“考える”機能を持つ車が街にあふれている。機械は人間にどこまで近づけるのか。(中略)

それでも「結局、機械は機械。とても人間がやる本ものの通訳にはかないません。ことにその場その場に合わせた表情まではねえ」と厳しい自己評価だ。次の目標は、テレビカメラなどで手話を映して意味を解説、それを電子音声に直す逆方向のシステム開発。「これに成功したからといって、手話を習おうという人が減ってはいけません。あくまで手話の自習用装置の開発ぐらいに思っているのです。やはり、人間のコミュニケーションは生身の人間同士が一番」(『朝日新聞』1984.9.27 朝刊、3)

たとえば、データ⑩は情報化社会のなかで新たなメディアの機能の恩恵を享受しながらも、「生身の人間」のやりとりこそがコミュニケーションの中心にあることを説明している。

⑩ 結婚生活八年。物質的には夫は何でも与えてくれます。家族のために一生懸命働いてくれますし、私を愛してくれていると思います。しかし二人の間には人間としてのコミュニケーションがほとんどありません。

彼と、大人同士の会話をしようとしても、全然耳を傾けてくれません。私の意見など一切無視して、心にトビラを下ろしてしまいます。ろくに返事もしないで、あるときは面倒くさそうに、あるときは高圧的に私をあしらうだけなので、とても自分がみじめに感じてしまいます。

こんな毎日を送っているために、私はだんだんほかの人に対してもちゃんと物が言えなくなってしまうました。なるべく短時間に言いたいことを言ってしまうおうとするため、文脈がこんがらがって、何を言っているのかわからなくなり、最近ではどもるようにさえなってしまうました。今では誰も私に興味を持つ人もなく、自信はゼロの状態です。どうか人生の指針を示して下さい。(物の言えない女性より) (『読売新聞』1980.1.6 朝刊、13)

またデータ⑪は、夫婦関係が破綻しているわけではなく「私を愛してくれている」と感じながらも、夫婦間に決定的なコミュニケーションの問題があると嘆くある女性の投稿である。相手に耳を傾け、高圧的にならず会話をするといったことこそが「コミュニケーション」の本質であることを、「人間としての」という表現を用いて説得的に示されている。データ⑩と⑪は、前者がメディアという新たななかかわりと対比されるかたちでもともとあった人びとのやりとりを「コミュニケーション」として再確認させ、後者は「コミュニケーション」という言葉が心理的・精神的な側面を含むものとして新たに確認されていく流れとなる。

こうした説明は、日常生活の物質的な豊かさが達成されていくことで、人びとの心理的な豊かさとは何かが掘り返されていく社会状況とも対応したものであると考えられる。つまり、「コミュニケーション」の真性や正当性が、「ころ」との関連において説明されていくことになる。

3-4 「心」のふれあい——「コミュニケーション」の価値

「真の」コミュニケーションと「人間としての」コミュニケーションに共通してみられるのは、断絶の根源として示されているのが人びとの「心」であるという点である。データ⑫はある会社が「コミュニケーション・グッズ」という製品を売り出したところ、売れ行きが非常に伸びていることを紹介した記事である。ものの機能ではなく人びとの情緒に訴えるもので、ここではコミュニケーションが「人と人との心の触れ合い」と説明されている。

⑫ ふだんは「寝るためにウチへ帰る」だけのサラリーマン諸君。連休中に、一度じっくり家の中を見回してごらん下さい。電話に花模様の着物が着せてありませんか。酒屋の名入りタオルの代わりに、一人々々の年齢に合ったカラフルなタオルが並んでいません

か。知らない間に、ちょっと家の中のふん囲気が変わっているはず。こうしたふん囲気づくりのためのこまごました商品が、いま「コミュニケーション・グッズ」と名づけられて、爆発的なブームを呼んでいるのです。「機能より情緒を」求めるようになった消費者心理の変化を、巧みにとらえた商法。流通業界では、これがマーケティングの柱になりつつあるのです。

流通業界にはやたらと舌をかみそうな横文字がはんらんしており、このため特別な用語集が出版されているほどだが「コミュニケーション・グッズ」だけは、どの用語集にも見当たらない。それもそのはず。この言葉は、高島屋の保坂英二・商品本部統括部長が一年ほど前に社内用に作ったもの。

したがって、ハッキリした定義などというものはない。作った本人の保坂氏も「強いて日本語に直せば、人と人との心の触れ合いを補助する商品群、とでもいうほかありません」という。（『毎日新聞』1977.5.5 朝刊、6）

戦後の時期が終わり、情報化と物質的な豊かさが人びとの暮らしを便利にさせている一方で、ものを単に売り買いするというだけでなく、ものを媒介とした人びとのやりとりを創出する側面が示されている。ここでコミュニケーションと消費が関連づけられるが、日本における「コミュニケーション」とは人と人との単なる会話や言葉のやりとりといったことではなく、「心と心の交流」が確認されるかどうかを絶え間なくモニターしつづける当事者の態度や意識の部分と関連した言葉として流通してきたと考えることができる。

⑬ 「世界コミュニケーション年」のコミュニケーションって、いったいなんだ。このかたかな九文字、英語で十三文字、辞書で引くと「伝達」「通信」「連絡」「交通」「情報技術」などとある。この感じはいかにもいかめしく、かたかなにしても、パソコンを手にしたオジンのように途方にくれるが、もともとは人間お互いが心を通わせ、理解し合うこと。そこでNHK「クイズ面白ゼミナール」とミリオンセラー「気くぼりのすすめ」で人気絶頂、鈴木健二アナに「日本語気くぼり学・主任教授」になっていただいて。

（以下一部抜粋）

——日本人得意の「どうも、どうも」に一家言をお持ちのようですね。

鈴木：民俗学の柳田国男さんが「とにもかくにもではないか」と書かれていますが、語源がわからない。だいたい日本人のコミュニケーションは礼儀マナーあってこそでありまして、マナーのない人とはいくら言葉かわしても、コミュニケーションできません。「きれいなおじぎは頭を上げるのをゆっくり」と小笠原流にあります。「どうも」で頭が下がりますか。「どうも」は日本人コミュニケーションの基本であるおじぎに合わないんです。「どうも」は田中角栄だけやったりゃいい。（笑い）

結局この世の中、物と心のバランスが必要でしょう。自動車が発達しても、それに伴う心、交通道徳が荒廃したらひどいことになる。コミュニケーションには、言葉と行動のバランスが必要ということでしょうか。

——きょうは、どうも……。いやいや、大変ありがとうございました。（『毎日新聞』

1983.2.21 朝刊、25)

こうしたプロセスの中で、「コミュニケーション」の中身は、communication の原義には含まれない意味合いがその中心であるかのように説明される。データ⑬に示しているとおり、コミュニケーションの一義的な「情報伝達」「通信」という意味は後景化し、「人間お互いが心を通わせ、理解し合うこと」が「もともと」であると結論づけられる。

「真ではない」「人間的ではない」ものを問い返す中で、コミュニケーションの本質は人びとの「心」に焦点化され、1980年代には少なくとも、「人びとが」／「相互的に」／「心を通じ合わせ」／「理解し合う」という「コミュニケーション」の型が一定受容されたと理解することができる³。

4 ポスト・パーソナルコミュニケーションへ

紙面の分析によって、日本において「コミュニケーション」という言葉は、マス・コミュニケーションにおける一方的な情報伝達という意味から、広く意味を拡散していく。その中で、マス・コミュニケーションからパーソナル・コミュニケーションへと、その性格が転倒していくことが指摘された。日常用語として定着するのは1980年代頃と言われているが、実際には1960年代から私的な関係性、たとえば親子、夫婦、上司／部下などのかかわりにおける生活上の悩み(＝「断絶」)が語られる文脈が存在していた。

まず、1960年代には「家族」という対象が挙げられ、夫婦や親子の間の断絶が社会的な問題として認識され始める。その後、1970年代には家族を含みつつ、企業や組織、教育などの領域が疎外や断絶のあるものとして指摘される。こうした流れは、そうした問題が個人的な関心にとどまらず、より社会的な文脈に結びついていることを説明している。つまり、家族や会社という人間関係よりも、背景にある「伝統的な日本文化」との結びつきが異文化との接触・交流の中で見直されていく。そして、1980年代には情報化や間接的な人間関係の広がりに対する反動として「心」の通わなさがコミュニケーションの問題として浮上しはじめる⁴。このように、コミュニケーションという言葉が日本において急速に発展した契機は、まさにマスのコミュニケーションが当時の人びとの生活上のやりとりを深く掘り起こす状況を作り出したからである。つまり、情報化社会の進展がこれまでとは異なる広範な意見交換を達成させていく一方で、身近な人間関係の疎遠さを招いたり、そのやりとりに存在する「何も伝えない伝達」という形式を問題としてあぶりだしていったといえる。くわえて、「真の」「人間としての」コミュニケーションという言葉を使用することにより、これまで疎外されてきた日常生活の問題を語るができるようになり、「些細」であるがまさに人間という存在の根幹にかかわる問題として提示することが可能になった。

また、コミュニケーションの原義はもともと「to share with others」という意味であったが、「私の断絶」を「私たちの断絶」のように説明することができるようになったといえる。つまり断絶があることを認識することから「コミュニケーション」は初めて考えることが可能であると考えられる。しかし、概念が普及するプロセスの中で、「コミュニケーション」とはは

じめから「良い」「悪い」という価値観が含まれており、その「良さ」に焦点をあてながら意味を変容させてきたといえる。なぜなら、それは社会との断絶、社会関係における断絶など、離れた二つの間にまたがるものとして認識され、隔たりがあるからこそ「つながり」の象徴として考えられるようになったからである。

鶴見俊輔・粉川哲夫（1988）の『コミュニケーション事典』が発刊されたのは、ニュー・メディアの到来によって変化する人間関係、とりわけそれ以前から存在していた直接的で対面的なくやりとり<の重要性や意味を問い直す目的があったからである。つまり、コミュニケーションが「マス・コミュニケーションあるいはコミュニケーション機械に傾いたニュアンスをもって用いられることが多いのは恐らく事実だとしても、もちろん本来のコミュニケーションはそれらに限られたものではなく、もともとずっと広い概念」（鶴見・粉川 1988: 2）だということを示すためである。鶴見によれば、様々なメディア機器が発明される以前から存在していた人と人の対面的なやりとりは、日常の中心を占めていたにもかかわらず、マス・コミュニケーションの成立地点から見た「プリ・マスコミュニケーション」として位置づけられてきたという。また、同様に学問領域においても、「個人と個人のあいだで日常的に繰り広げられている直接的なコミュニケーションの些細な言葉と感情のやりとりを正面から問題とすることがなかった」（長谷 2009: 12）とされる。

しかし、鶴見の指摘は、マス・コミュニケーションがコミュニケーション概念の中心に考えられてきた時点では有効な問題提起となるが、現代においてはややその有効性を失っている議論である。間接的な人間関係、メディアによる人間関係に対する直接的な人間関係の回復というわかりやすい二軸ではなく、むしろ現代では両者は切断されることなく結びついているものである。1990年代以降のインターネットの浸透によってわれわれのコミュニケーションはさらに複雑なものに変化している。本稿の分析においても、「コミュニケーション」概念の普及プロセスは、「コミュニケーション」の内容に関連した「べきである」という規範の流れと、情報通信の発展によって直接的なかわりが形作られていくというメディアの流れの両者がせめぎ合う形で進んできたことがわかる。そういった意味では、われわれはマス・コミュニケーションを経たパーソナル・コミュニケーションの先である、ポスト・パーソナルコミュニケーションの時代にあると考えられるだろう。

そうした時代背景において再考しなければならないのは、「何をコミュニケーションと呼ぶことができるか」というプロセスにおいて「コミュニケーション」—たとえば、「心の通わない」コミュニケーションや「何も伝えない」コミュニケーション—が周縁化されてきたという側面である。言い換えれば「コミュニケーション」が、「断絶」というネガティブな事象を、「つながり」というポジティブなものへ変換するという設定そのものを見なおすことである。コミュニケーションによって、さまざまな関係性の間には「断絶」があることが認識できるようになった。しかし、コミュニケーションとは決して「断絶」そのものを埋めるものではなく、「断絶」の間に通っているものにすぎないという視点の設定が有効であると考えられる。注意しなければならないのは、本稿でみてきた記事では「真の／人間の」「心の」という表現からわかるように、コミュニケーションとはつながりの質をめぐるものであり、そう

した質へ注視の眼が向けられるのは、両者の間の「断絶」そのものが問題であるかのように描かれている点である。つまり、「断絶」は「真の／人間の」「心からの」コミュニケーションを行えば消失すると信じられているということである。コミュニケーションの対象領域が家族から企業、教育、社会構造へと変化していく一方で、変化しない部分として断絶には常に「埋めるべきものである」という規範意識の存在がある。そしてそれは現代のコミュニケーションの意味内容にもおおきく影響を及ぼしていると考えられる。

5 おわりに——コミュニケーション概念の再検討にむけて

現在のコミュニケーションの問題の多くは、どのような断絶があるかということが省みられないことによって、それがかえって何の問題であるかを考えることが困難になってしまっている点にある。これは、マス・コミュニケーションに対するアンチテーゼとしての身近な人と人との交流が生活者にとって描き出されたように、ナマの交流こそ「真の」コミュニケーションであるという大量の言説が、かえってそうでないかかわりかたを見えにくくさせている原因ではないだろうか。

また、現代のコミュニケーションの問題は、何がコミュニケーションであるかをめぐるプロセスではなく、コミュニケーションによってもたらされる帰結をすでに含んでしまっている点であるといえよう。そして、その帰結がコミュニケーション概念の中心になっていることが挙げられる。コミュニケーションを行うことで立場の違うものたちが相互に理解しあえ、調和的で良好な関係を築くことができるという点が非常に先鋭化している。本稿の分析から、「真の」「人間の」「心の」といった表現が、そうした理解や良好な関係が良いという認識に一定の影響を与えてきたと考えられる。

しかしながら、こうした帰結の自明視は、そうした地点にたどり着かない多様なコミュニケーションを、「真ではないコミュニケーション」として捨象してしまうことになる。また、コミュニケーションが個人に帰せられる傾向のある現代では、生活者そのものが排除される危険性を常に孕んでいるといえる。こうした排除を回避するためには、これまでみてきた一種の理想的コミュニケーションではなく、これまで「真のコミュニケーションではない」とされてきたものへと目を向ける必要があるだろう。つまり、コミュニケーションとは「断絶」があることと同時にそれが繋がれる、繋がれると同時に断絶するという反復—運動性—であるのではないか。筆者はその一つの手立てとして、人びとが「一時的に」集う場をコミュニケーションとして捉えなおすことが必要だと考えるが、この点については今後の課題としたい。

注

- 1 貴戸理恵 (2018) は「コミュ障」の問題はコミュニケーションがうまくいかないことを指すのみでなく、『うまくいっていない自分を他者はどう思っているのか』という再帰的な視点』を生じさせることであり、同時にそうした視点をもちえる社会性ゆえの脱落を生むという。
- 2 1960年代以前の記事は16件である。なお、主要三紙においてもっとも初めに登場するのは、1901(明治34)年の記事でシベリア鉄道についての説明が行われているものである。「ストレテンクスからハヴァロヴスクまでハ東清鐵道の権利を得たので當分延期といふ事になつて居る然し此間にハシ

ルカ及び黒龍江の水運があるから今日にも露の本國と浦潮との間にスチームコミュニケーション」(『朝日新聞』1901.1.23)とあり、まだコミュニケーションという表現ではないが、蒸気機関車を指すと思われる。

- 3 もう一つの源流としては、「場」としてのコミュニケーション／コミュニケーションの場が挙げられる。たとえば、銭湯が入浴の場ではなく地元住民の自由な交流を提供できる機会として、見直しが図られている記事(『読売新聞』、1978.1.5 夕刊、5)が挙げられる。Communication の原義には道路や線路がひかれるという「交通的設備」の意味合いが含まれるが、こうした流れには原義に近い人びとの移動、とくに「集う」という観点が含まれている。
- 4 また、量的な増加と符合するが、1980年代前半までには見られたコミュニケーション「である」／「でない」という確認作業が、1980年代後半にはあまり見られなくなり、「コミュニケーションを取る」「コミュニケーションを図る」のような、記号化が顕著に進んでいる。

文献

秋津元輝・渡邊拓也編、2017、『せめぎ合う親密と公共——中間圏というアリーナ』京都大学学術出版会。

長谷正人・奥村隆編、2009、『コミュニケーションの社会学』有斐閣。

貴戸理恵、2018、『「コミュ障」の社会学』青土社。

中島梓、1991、『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房。

中根千枝、1967、『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』講談社現代新書。

尾関周二、1995、『現代コミュニケーションと共生・共同』青木書店。

田中義久、2000、『コミュニケーション理論史研究(上) コミュニオンからコミュニケーションへ』勁草書房。

種村完司、2007、『コミュニケーションと関係の倫理』青木書店。

鶴見俊輔・粉川哲夫、1988、『コミュニケーション事典』平凡社。

脇忠幸、2018、「「コミュニケーション能力」言説の内実とその背景——新聞読者投稿欄をデータとして」『福山大学人間文化学部紀要』18：1-17。

(おぞえ ゆうた、関西学院大学、yt.ozoe@gmail.com)

(査読者 渡邊拓也、川端浩平)

Discourse Analysis on Creating “Communication”: Expressions in Newspapers from the 1960s to 1980s

OZOE Yuta

The purpose of this paper is to illuminate the genealogy of the idea of “communication” and process of how its meaning is confined to refer to social relationships in Japan. To clarify this inquiry, we analyzed newspaper articles from the 1960s to 1980s. This paper argues that such usage of the term “communication” has been observed since 1960, and was derived from the original usage to simply imply that the media transmit information to facilitate social relations among people. Also at that time, the term “communication” began to be used to emphasize the “discontinuity” regarding social relations in people’s lives and to send normative messages to overcome this problem. To critically understand the various current issues regarding normative communication and seek alternative ways of communication, we must reinvestigate how it was created in the past.